

第2回目の設定例は、前回PCにダウンロードしたEXCELファイルをiB Miの別ライブラリーにエクスポートします。

ここでは、便宜上予めライブラリー名「YAMADA」に CRTDUPOBJコマンドで空の「HINMSP」というテーブルを作成しています。

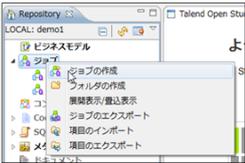
ご注意:

ボランティアとしてご紹介しておりますので、本書に記述した内容に関して仮に問題があったとしても、ご利用される皆様の責任において、ご活用いただけますようお願いいたします。

補足:

Talendをお使いになる上での注意点としては、Talendのバージョンによって出来たり出来なかったりする機能がありました。今回テストしたケース(範囲)で言えば、TOS DI-Win32-r91494-V5.2.0RC1では問題なく稼働しましたが、「TOS DI-Win32-r84309-V5.1.1」では、同じ定義をしても実行するとアペンドしたり、SQLのテストが出来ないなど、様々な問題が起き余分な時間を使ってしまいました。
業務で使うにはやはりコミュニティー版では無く、ライセンス版をお使いになることをお勧めします。
また今回ご紹介した設定は簡単な機能のみでしたので、研修など受けずに出来ましたが、もっと高度な機能をお使いになる場合は本格的に活用される場合は、研修をお受けになる事をお勧めします。

それでは、第2回目の説明に入ります。
 前回と同じように、新しいジョブを作成します。
 「ジョブ」にカーソルを合わせ、右クリックして「ジョブの作成」をクリックします。



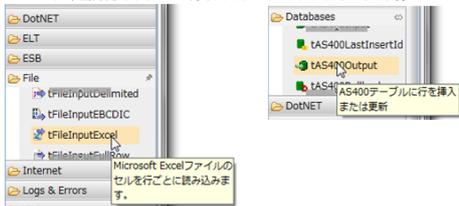
任意に名前を入力して「終了」をクリックします。

Name	PC_EXCEL2007_to_IBMI
Purpose	PC_EXCEL2007_to_IBMI
Description	PCのEXCEL2007形式ファイルをIBMIの最終DBにエクスポート

コンポーネントをドラッグするViewが出てきます。



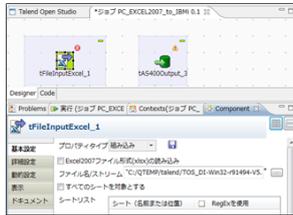
コンポーネントの中から、「File」の「tFileInputExcel」をドラッグ＆ドロップします。
 取り出す方なので、「xlsxinputxx」になります。
 ついでに、出力先であるIBMIの方もドラッグ＆ドロップしてしまいましょう。



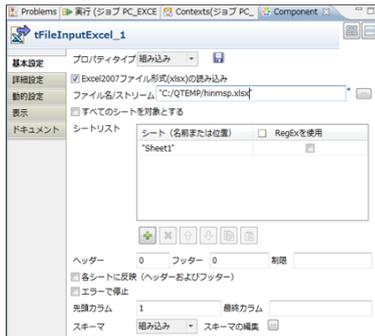
こうなります。



それではそれぞれについて、定義していきます。
 以下、定義の設定要領は前回と同じですので、要点について説明します。
 まずはEXCEL側の定義です、EXCELのアイコンをクリックしてください。



上記を変更していきます。



excel2007... にチェックを入れます。
 PCの保管元のパスとファイル名を入れます。

excelのシート名を指定する場合は、" + "を押して追加変更してください。

続いて、「詳細設定」でエンコードの方法を指定します。

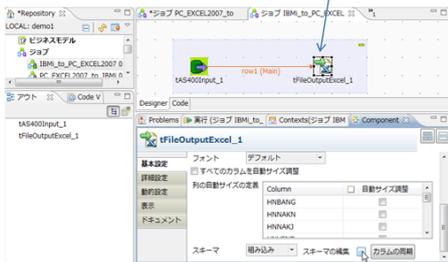


"ISO-8859-15" を "Windows-31j" という文字で書き換えます。

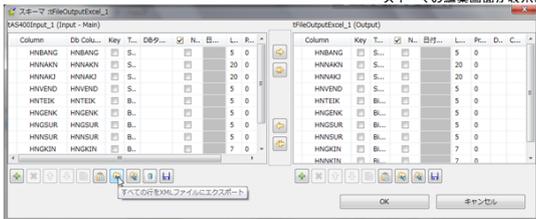
次にスキーマの編集を行います。

[ヒント]

EXCELの場合、テーブルのようにフィールド属性を持ちません。従って1つ1つ定義するかまたは、以下のようにスキーマを保管しそれを使用する方法があります。
ここでは、以前IBMからダウンロードした時に取得したスキーマを使う方法を説明します。
IBMからPCへダウンロードしたジョブを編集します。(ジョブのIBMにPC_EXCEL2007..をクリックします)
IAS400Input_1 または IFileOutputExcel_1いずれかをクリックしてください。

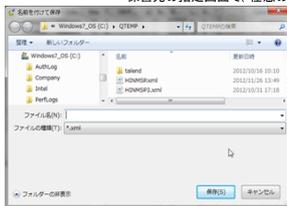


'スキーマの編集'をクリックします。
スキーマの編集画面が表示されます。

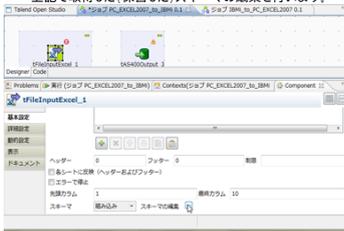


XMLファイルにエクスポートするアイコンがありますので、これをクリックします。

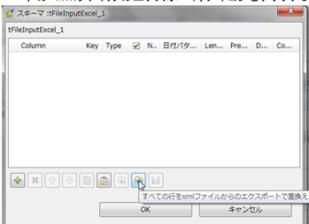
保管先の指定画面で、任意の場所に名前を付けて保管してください。



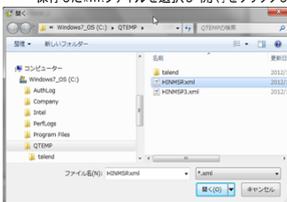
それでは設定を再開します。
上記で取得した(保管した)スキーマの編集を行います。



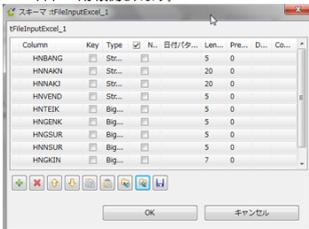
'スキーマの編集'をクリックします。
下の'.xml'ファイルのエクスポートアイコンをクリックします。



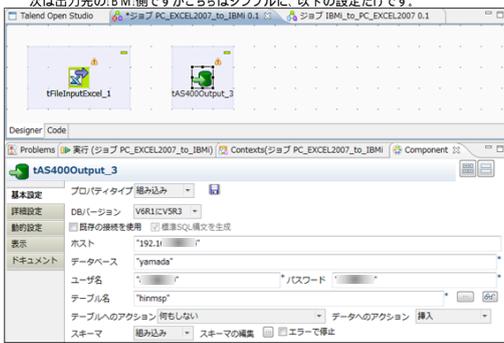
保存した.xmlファイルを選択し'開く'をクリックします。



スキーマが展開されます。

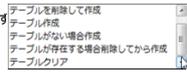


次は出力先のIBM側ですがこちらはシンプルに、以下の設定だけです。

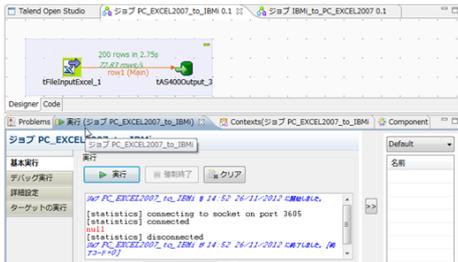


ここだけ入力

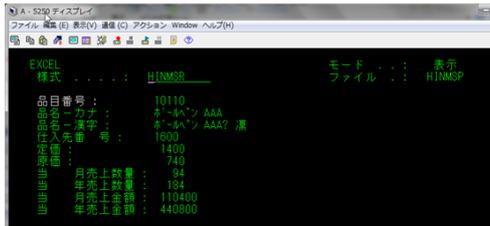
テーブルへのアクションが幾つか用意されていますが、必要に応じて変更してください。



後は繋いで実行します。



間違いなければ、終了コード0 で完了します。



これがアップロードされたIBMのレコードです。
 添、の機種依存文字も文字化けせずに表示されています。

第2回入門編は以上です。 とても簡単です。
 第3回入門編は、PCからIBMへのアップロードは同じですが、既存にテーブルが存在しない場合どのようににIBM側で作成されるかについて見ていきたいと思います。